真坊と和尚さま

小川未明

青空文庫

夏休みの間のことでありました。

がき大将の真坊は、先にたって、寺のひさしに巣をかけたすずめばちを退治にゆきました。

「いいかい、一、二、三で、みんないっしょに石を投げるのだよ、うまく命中したものが偉いのだから。」と、いいました。みんなは、目をまるくして真坊のいうことを聞いていました。

「はちが追いかけてくると、こわいな。」と、臆病な常ちゃんが、いいました。

「追いかけてきたら、竹の葉でたたき落とそうよ。」と、真坊が、いいました。

「ああ、それがいいね。」と、英ちゃんが、同意しました。

「みんなが、竹やぶへいって、竹を切ってこようや。」と、誠くんが、いいました。

「ああ、竹を切ってこよう。」

四、五人の子供たちは、寺の竹やぶへ竹を切りにゆきました。やがて、てんでに、手ごろの青々とした、葉のついている竹を切ったり、折ったりしてきました。

「さあ、これでいい。」

そういって、みんなは、往来で石を拾って、お寺の境内へ引き返してゆきました。

「だれが、号令をかけるの?」と、誠くんが、いいました。

「まあ、待ちたまえ、僕は、それはうまいから、ひとつうまくあの巣に当ててみせようか?」

と、真坊が、いいました。

原っぱで、野球をするときに、ピッチャーをしている真坊のいうことを、みんなは、だまって聞きながら、承認しなければなりませんでした。

「命中さしてごらん。」と、みんなは、手に石を握ったまま、真坊のするのを見ていました。

真坊は、ボールを投げるときのように、片足を揚げて、高いひさしにかかっている、円いはちの巣をねらって石を投げました。石は、まっすぐにひじょうなスピードをもって、うなっていったが、巣をはずれて、ひさしの板に当たると、大きな音をたててはね返りました。

この音が、あまり大きかったので、みんなはびっくりして、そこから、門の方に向かって逃げ出しました。

「真ちゃん、だめじゃないか、こんど僕がうまく命中してみせるよ。」と、英ちゃんが、いいました。

「ああ、みんなが一度ずつやってみようよ。そして当たらなかったら、一、二、三で、いっしょに投げることにしよう。」と、真坊が、意見を持ち出しました。だれも、がき大将の意見に反対するものがありません。

「さあ、英ちゃん、うまくお当てよ。」と、ほかの子供たちは、英ちゃんをはげましました。英ちゃんは石を握って、足音をしのんで境内へ入ってゆきました。そして、上を見て石を投げました。石は、太い柱に当たって、足もとへはね返って落ちたので、あわてて逃げてきました。

「こんど、誠くんだ！」

やはり、石は、うまく当たりませんでした。最後にいちばん臆病な常ちゃんでした。もとより、うまく当たりっこがありません。

「さあ、みんなが、いっしょに投げるのだよ。」と、真坊は、いって、

「一、二、三っ。」と、号令をかけました。

石は、散弾のように、はちの巣を目あてに飛んでいって、ばらばらと当たりに当たって、大きな音がしました。

すると、同時に、

「だれだ！」と、大きなどなり声がして、庫裏の方から、和尚さまが飛び出してくるけはいがしました。

みんなは、大急ぎで、首をすくめて逃げてきました。

「明日、ラジオ体操にゆくと、和尚さまにしかられるかもしれない。」と、常ちゃんがいいました。村では、毎朝みんなが寺の境内に集まって、ラジオ体操をすることになっていました。

「わかりはしないや。」と、英ちゃんが、いいました。

「しかられたって、こわくないね。真ちゃん。」と、誠くんが、真坊の考えをききました。真坊は、にやり、にやりと、だまって笑っていました。彼は、このあいだから、一人で、はちの巣に向かって石を投げていたからであります。

「いいよ、しかられたら、僕だといいよ。」と、真坊が、いいました。

「真ちゃん、しかられたっていいのかい。」と、ほかの子供たちが、ききました。

「僕は、ゆかないから。」と、真坊が、いいました。

「真ちゃん、ラジオ体操にゆかないの？　休まずにいくと、ご褒美がもらえるのだよ。」と、常ちゃんが、いいました。

明くる日、ラジオ体操に真坊の姿は見えませんでした。もう二、三日で、終わりになるのです。

ところが、いちばん最後の日に、真坊は、やってきました。友だちは、しばらく見なかった真坊がきたので、そばへ寄ってきて、

「真ちゃん、どうしたんだい。ご褒美は、昨日みんながもらったんだよ。」と、いいました。

「メダル？」と、真坊は、つまらなそうな顔つきをしました。

「ううん、ミルクキャラメル。」

「キャラメルなら、ほしくないや。」と、真坊は、にやりと笑いました。そして、体操が終わって、帰るときです。どこから出てきたか和尚さまが、

「こら、真坊！　おまえのはここにある。」と、いって、ミルクキャラメルを下さって、真坊の頭をくるくるとなでられました。

このとき、真坊は、和尚さまの厚意をうれしく思って、この後、はちの巣に石を投げまいと心に誓ったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　11」講談社
　1977（昭和52）年9月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店
　1936（昭和11）年12月
初出：「台湾日日新報」
　1936（昭和11）年10月31日
※表題は底本では、「真坊《しんぼう》と和尚《おしょう》さま」となっています。
※初出時の表題は「真坊と和尚様」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年6月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真坊と和尚さま

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/